

稱讃二八〇号

二〇二六年四月一日発行



あす
明日ありと

おも
思うところの

あだやぐら
徒桜

よわ あらし
夜半に嵐の

ふ
吹かぬものは

母を亡くし、父とも生き別れた九歳の松若丸
(親鸞聖人)が、叔父の日野範綱に連れられて
青蓮院で得度(出家)する際、慈鎮和尚から
「今日はもう夜も遅いから得度式は明日にしよ
う」と言われたのに対して、親鸞聖人が、今、得
度式を執り行つてほしいと願つて詠んだ歌とい
われております。

発行 浄土真宗本願寺派 稱讃寺
〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

H P shousanji.com

メール shousanji@festa.ocn.ne.jp



鹿兒島 稱讃寺 納骨堂「讃光堂」前駐車場
父の十三回忌法要が終わり、東京に戻った
三月末に咲いたようです。

都内のあるご寺院の私と同年代ぐら
いのご住職が、若くして五事棒を継が
れたことのお話を聞く機会がございま
した。
学生時代に、ご住職であられたお父
さまがお病気でお亡くなりになられま
した。

病に倒れても、お寺のこと、ご門徒さ
まを大切にしておられたお父さまの意
志を継ぐことが出来るか不安であら
れたそうです。若千二十代の自分には
重荷を感じていたけど、ここまでやれ
てきたことに、還相の仏・菩薩として前
住職のお父さまのはたらきがあること
を感じているようなお話でありまし
た。

一方、私自身を振り返ってみますと、
十二年前、鹿兒島・鹿屋の病院に父の
お見舞いに行つたとき、呼吸器をつけ
ながら、私に三つのことを伝えました。
一つには、早く結婚しなさい。
二つには、早く宗教法人にしましなさい。
三つには、無駄遣いしないように。
でした。

その頃、私は五十歳になったばかり
で、稱讃寺を開設して十年が過ぎよう
としている頃で、まだまだ十年、これか
らだと思っていました。

それが、気づいてみますと、あつとい
う間の二十余年が過ぎてしまつていま
した。コロナ禍もありましたが、父が往
生してからの十余年間、自分が何をし
てきたのかと思うばかりです。

2026 (令和8) 年度 稱讃寺門信徒会費 年会費 6,000円

①城北信用金庫一ツ家支店

名 義 浄土真宗本願寺派 稱讃寺教会
代表 北村信也
口座番号 普通 6176051

②ゆうちょ銀行 店名四四八

名 義 キタムラ シンヤ
口座番号 普通 2374851



父から言われた三つの事、
一つには、早く結婚しなさい。
二つには、早く宗教法人にしなさい。
三つには、無駄遣いしないように。のいずれも成し遂げていないのです。三つ目は、無駄遣いはしているわけではないと思いますが、積立も出来ていないことに通じているようです。
振り返りますと、その内、その内と、後に回していました。
最近連絡を取っていないなあと思いがち、その内、会えるだろうと思っていると、いつの間にか過ぎてしまっていて、会う機会を無くしてしまふことがあり、思い立ったら、すぐにでも会いに行けばよかったと後悔することはばかりです。

十三回忌の法要で、兄の住職が最近、父が夢に現われることを話しました。
「どうだい」と語ってくれているようだ。



私の方はどうか？夢に現われたのかさえ、おぼえていないほど、口で言うだけで、心底から思いが至ってない。

この度のご講師は、坊守の弟さんで、熊本・法雲寺のご住職の加藤尚史師でありました。既にお父さまお母さまともご往生なさっておられます。
今回のお話では、若くして、がんでお亡くなりになられた大学のサークルの先輩のお話をなされました。
サークル仲間だった人から、その先輩ががんで長くないことを知らされ、会ってやってくれと言われたそうです。どう接してよいかわからなかったそうですが、サークル仲間が集まり、一緒に飲み歩いたそうです。
散会して、それぞれが別れていった後、最後残ったところで、やはり挨拶をしなければと思い別れの挨拶をしたそうです。
その先輩は、文集を書き残されていました。その中に、「間に合った」というタイトルの文があります。
「死ぬ」と言うことは、辛く悲しいことです。しかし、この先にお浄土という安心の心持ちがあり、仏に成るといふ永遠のいのちを恵まれると聞き得たことが、「間に合った」といふことなのかなあと聞かせていただきました。

「前に生まれんものは、後を導き、後に生まれんひとは、前を訪え。連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽くさんがためなり。」『安樂集』『教行信証』後序「註釈版聖典」四七四頁とあります。

このお言葉は、今こうして、この世を歩いていけるのは、先人の還相の仏・菩薩としてはたらいっておられるからだと思わうところに、先人の生前の思い・願いに込められた証だとか、先人の意志を継いでいくことが、何よりの報恩であるという意ではないのではないのでしょうか。

確かに、先人を思い、意志を継ぎ、精進していくことは、立派な人生だと思ふのですが、そうでなければ、お念仏申す意味がないのでしょうか。

そうならない自己があるところにこそ、阿弥陀さまの大きな慈悲があらわれるのではないのでしょうか。

「偈ぶ」とは、私が相手をお互いに思っているところではなく、お互いに尽すという意味だそうです。私が思っている以上に父は仏さまとして、私を見捨てずにいてくれるのですね。

合掌



特集 金子大榮師のご領解 ㊦

『親鸞の人生観』

教行信証真仏弟子章

金子大榮 法蔵館 一九六六年初版

十九 妙好人(上)

本文 またいはく、若念仏者よりしも生諸仏家にいたるまで已来は、まさしく念仏三昧の功能超絶して、まことに雑善をして比類とあることをうるにあらざることをあらはす。ふ

たつには、能念のひとを指讃することをあかす。みつには、もしよく相續して念仏するひと、このひとはなほだ希有なりとす。さらにものとしててもこれにたくらぶべきことなきことをあかす。かるがゆへに分陀利をひきてたとへとす。分陀利といふは、人中の好華となづく。また希有華となづく。また人中の上上華となづく、また人中の妙好華となづく。このはな、あひつたへて蔡ハナとなづくる、これなり。もし念仏のひとは、すなはちこれ人中の好人なり。よつには、弥陀名を専念すれば、すなはち観音勢至、つねにしたがひて影護したまふこと、また親友知識のごとくなることをあかす。いつつには、今生にすでにこの益をかふれり。いのちをすてて、すなはち諸仏のいへにいらん。すなはち浄土これなり。かしこにいたりて長時に

法をきき、歴史供養せん。因まどかに果満す。道場の座あにはるかならんやといふことをあかす。已上

口語訳 またいいう。経には「念仏する、その人は、是れ人中の白蓮華である。観音・生死は其の人の親友となりたもう。其の人はやがて道場において諸仏の家に生まれる」と説かれてある。これ正しく念仏の功能は超え勝れて雑善の比類でないことを明かすものである。ここに弥陀仏の名を専念する其の人を讃えて白蓮華と喩えられる。これ能く相續して念仏する者は甚だ希有であつて、比ぶべきものないことを喩えたものである。白蓮華は人間界の好華といわれる。それはまた希有華といわれ、上上華といわれ、妙好華といわれる。言い伝えて蔡華といわれるは、この華である。されば白蓮華に喩えられる念仏者は、即ち是れ人中の好人であり、人中の上上人であり、人中の希有人であり、人中の最勝人である。これに依りて弥陀の名を専念する者には、観音・生死は常に随つて影護したまふことは、親友の如くである。既に今生にこの益を蒙り、来世には即ち諸仏の家に生まれる。諸仏の家とは即ち浄土である。彼処に至れば寂かに法を聞き仏に事えて行願を円満し、遠からず成仏の道場に坐する身となるのである。

一 本文は『観経』に「もし念仏する者は、当に知

るべし、この人は是れ人中の分陀利華なり。観世音菩薩・大勢至菩薩、その勝友となりたまふ。まぎに道場に坐し諸仏の家に生ずべし」と説かれてある。その経説の一句・一句を解釈せられたものである。それでやや煩雑に感じられるが、内容はきわめて単純であつて、口語訳の釈も念が入っているから、善導大師にもふかく感激があつたのであろう。親鸞聖人もまた『正信偈』に、「一切善惡の凡夫人、如来の弘誓願を聞信すれば、仏この人を廣大勝者とのたまへり。この人を分陀利華と名づく」とたたえられた。これが今日も「妙好人」という名の行わ

れている典拠である。

しかるに経に分陀利華というのは白蓮華のことであるが、この白蓮華は好華とも希有華とも上上華とも妙好華ともいって、愛でられているものである。それで蔡華ともいつたえられ

た。蔡は亀で、聖者の出世には白亀が千葉の白蓮華に乗つてあらわれるということである。そのめでたい華が白蓮華である。そのように念仏するものは、人中の好人・妙好人・上上人・希有人・最勝人であると称められるのである。

二

しかしこの妙好人は観音・勢至に親友・知識として影護せられて浄土に生まれ、おもうように行願を満足することができるのである。

ら咲き出でたる花であるということがわすれられてはならない。花のうるわしきは、桜・牡丹・バラ等にはあるのではなく、高山植物にも、野原に乱れ咲くものにも、それぞれの美しさはある。しかしそれらはみな、人間生活にのぞまれている何かの徳を象徴するものでもあろう。そのなかにありて、とくに白蓮華が賞翫（しょうがん）せられるのは、泥のなから咲き出でていることである。それが「高原の陸地には蓮華は生ぜず、卑湿の淤泥にいまし蓮華を生ず」と説かれた『維摩経』の経意である。

その経意のあらわすものは、仏教も在家のものとなることにおいて大乘といわれるということである。出家の聖者は清浄の生活をせられるとしても、それは高嶺の花である。いま白蓮華というものはその清浄の生活ではない。煩惱のところに称えられる念仏の美しさを名（よ）ぶのである。

在家とは、妻子をもち、職業がある、ということである。妻子あれば愛著があり、そこから「いかり、はらだち、そねみ、ねたむ」ということもでてくるのである。それはいかにしても清浄とはいわれない。汚濁であり穢悪である。また職業があるかぎり、利害損得にうごかされないではおれぬのであろう。その根性には自善他非の情はつきまとい、必要悪と自己を欺くところがとれない。それが在家の生活である。しかるに念仏は、その愛欲の身において称えられるものであり、煩惱のところにのみあらわれるものである。しかしてその念仏者であるこ

とが、煩惱の生活をはなれないにもかかわらず、妙好人とならしめるのである。だから、もし妻子があつても、その愛著に煩悩悩まないものならば、その人は妙好人とはいえぬのであろう。念仏者とは世間離れた人ではない。世捨人は市にもあり野にも見出せるかもしれないが、それは凡夫とはいえぬものであろう。そのような意味においてめずらしいのは妙好人ではない。いかなる人であつても、その煩惱の身のままに念仏すれば、その人は妙好人といわれるのである。

三

これに依りて妙好人の語義をおもうに、好きとはうつくし、みめよし、ということではあるが、とくによしみ、なかよしという訓にころひかれる。好とは相善・親善を意味するものである。しかれば好人とはすかれる人、親しめる人ということであろう。それがさらに妙好人と繰返された妙な精であるから、純粹にということと解してよい。したがって妙好人とは無条件に親しめる人ということである。

しからば妙好人とは、何のわだかまりもなく人に親しまれるものであろう。それは煩惱の生活のあるがままに念仏する人においてとくに感ぜられるものではないであらうか。学識の高い人、修養のできた人には敬意を表することはできるが、何となく親しめないものがある。聖教については法義を沙汰することは、在家の信

者にまでのぞましいことではない。法義をのみ沙汰する人びとには常人のちがつけないものが感じられる。うち碎けてなんの頼むところもなく、世にありふれた凡人として念仏する人に親しみを覚えしめられるものはわたしだけではないであらう。しかれば妙好人とは念仏する凡人より他にはないのではないであらうか。ひるがえつておもうに、他に親しまれる人となることは、他に親しむことのできる人となることであらう。学識ある知者も、修養を積んだ徳者も、自身と他人との間に壁をつくっているようである。その壁を破るものが念仏である。だからその距てを棄てることにおいて学者も大衆と語ることができ、徳者も凡人とおなじころとなるのである。愚鈍の身もそのような学者と語ることにはたのしみをおぼえる。かつて厳格であつてちがつき難い人であつても、念仏もうす身になられると、その厳格はすこしもかわらないにもかかわらず、親しみ懐かしまれる人となられた、という例はしばしば耳にするところである。

まことに「共に是れ凡夫のみ」ということが知られてみれば、自他に距てをもたねばならぬ道理はないのであろう。それが何故か容易ではない。その容易でないことが、念仏によって行われるのである。そこに念仏者が妙好人といわれるゆえんがあるのである。

四

しかるにその妙好人はまた希有人といわれる

希有人とはまれに見られる人ということであるから、極めて少数であるとおもわれる。そこから「郡に一人、国に一人」ともいつたえられている。自分はいくまでもなく、多くの念仏者を見ても、それを妙好人とはいわない。特異の言行をなせる信者だけを妙好人と呼んできたようである。その珍重のあまり、妙好人とは畸人であるかのような感を懷かしているのである。それでよいのであろうか。

經に説かれたる妙好人は少数者であるという事ではない。希有人ということも白蓮華に寄せてのことばである。その白蓮華は至るところにみられて希有華である。とすれば念仏者は百万人あれば百万の希有人があるということであろう。われらは念仏することにおいて自他ともに妙好人といわれる身となるのである。それは特異の言行を為すからではない。日常生活のままに念仏するから妙好人といわれるのである。

しかし念仏する自身を妙好人ということとはできない。それは自身としていられているものは煩惱の泥より外ないからである。されどその煩惱の自身も念仏することにおいて妙好人といわれることをよろこばねばならない道理があるであろう。そこに思い知られることは、悲しいころにおいて自身は希有人であることである。わたしはしばしば自分ほどに愚かなるものはないという感じにうたれることがある。聖教における愚鈍の二字は、わたしのために用意されてあったのであろうか、と目頭を熱うせ

しめられる。されどそれを人に語ることができない。それは謙遜とか辞令とかに解せられるだけであるからである。ただ真にその愚鈍であることをしられるものは大悲の仏心より他ないのであろう。それは希有なる悲しき人生の経験において念仏する身にも感ぜられることである。こうして悲しむべき希有なる身も、念仏すれば大悲の仏心をいただき、よろこぶべき希有人と転成せられるのである。

これによりて思うに「五劫思惟の願をよくよく案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり」ということも、そのよろこびではなかったであろうか。

「さればそくばくの業をもちける身にてありけるを」という述懐には、わが身に希有なるおん悲しみがあつたのであろう。とすれば、この身のための本願であることをよろこぶ念仏者こそ、妙好人と呼ばれるものであらねばならない。それは自称することができないだけ、その名(よ)ばれるもののありがたきである。

五

それは言い換えれば念仏はいかなる性格にもいのちと光とをあたえるということである。わたしが念仏の師友・同朋において感知せしめられることは、その人でなくては見ることできない行であり、その人からでなくては聞くことのできないことばである。その特殊の言行において感ぜしめられる普遍的なるものは、学識や規範によりて知らしめられる一般のもの

のとはまったく異なるものである。

この意味において妙好人はまた上々人といわれ最勝人といわれる。それはとくに尊まれる人ということである。その人でなければという希有人でなくては見出される尊きである。しかしその尊きは親しきとはなれて感じられるものではない。念仏者の親しきは馴れ合いではなく、敬うころにとまなう懷かしみである。だからまた最勝人といっても、世間のいわゆる偉大なる人物というようなものではない。その人において、おのずから感ぜられる高貴性ともいふべきものである。したがってその上々人は念仏の声の聞ゆるところ、いづくにもあるであろう。最勝人は大地を耕す人にも、商う人にも、家の内にも、職場のなかにもあるのである。それは念仏するものの呼称であるからである。

浄土真宗のビハークアを考える

第5章 アジャセ王の救いの過程

十一 縁起というものの見方―かたちなき罪

過去の罪過と未来の墮極におびえる阿闍世に對して、釈尊は、「どうして地獄に墮ちることが決定しているのか」と話しかけ、その阿闍世の地獄行きへの思いが、有、すなわち、執着になつてゐることを気づかせようとする。釈尊は、一つの罪がさまざまな因と縁によつて生ま

れてくると説明する。そして、釈尊は阿闍世にこのように説いた。

「もしなんぢ父を殺してまさに罪あるべくは、われら諸仏また罪ましますべし。」(信巻註釈版聖典二八二頁)

すなわち、「あなたの父、頻婆沙羅を支えてきたのは私たちだから、汝、阿闍世に罪があるのなら、私を含めた仏たちにも罪があるはずである」と、釈尊は、阿闍世に語りかけた。

縁起のもの見方からすれば、阿闍世の罪は、彼単独の罪と言うよりも、阿闍世の父や母、占い師、阿闍世を教唆した提婆達多、さらには父の親友であった釈尊にも関係していたということである。阿闍世の罪が、釈尊自身にも連続している罪であるとして共有し、ともに抱えようとする釈尊の姿勢は、まさに自他一如の慈悲を象徴する。と同時に、罪が縁起として相互に関係しあい、連鎖していることをも示している。

「もろもろの庶類(しよるい)のために不請(ふしょう)の友となる。群生(ぐんじょう)を荷負(かぶ)してこれを重担(じゅうたん)とす」

(『無量寿経』註釈版聖典七頁)

〈現代語訳〉

「仏は、あらゆる人々のために、求められなくても親友となり、生きとし生けるものを背負って、すべてを身に引き受ける」

この仏の願いは、阿闍世の罪とともに生きようとする釈尊の姿勢に、とてもよくあらわれている。

また、釈尊は、阿闍世に向かって、
・父、頻婆沙羅王にも犯した罪があったこと
・錯乱によって思いがけずおこす罪があること

と
・世間の罪に対する見方とは異なつた出世間の見方があることを示した。

さらに釈尊は、
・有無という執着を離れて、縁起思想から、ものごとを理解する視座を与えている。

これについては、次のように『涅槃経』煩行品に説かれている。

「大王、たとへば涅槃は有にあらざ、無にあらずしてまたこれ有なるがごとし。殺もまたかくのごとし。非有・非無にしてまたこれ有なりといへども、慚愧の人はすなはち有にあらざとす。無慚愧のものはすなはち無にあらざとす」

(信巻 註釈版聖典二八五～二八六頁)

すなわち、「阿闍世王よ。たとえば、涅槃が有でもなく無でもなくて、しかも有であるようなものである。殺害もまた同じであり、有でもなく、無でもなくて、しかも有なのである。心の底から罪を詫びて慚愧している人には、もはや殺害の心は存在しない(非有)。しかし、自分が殺害を犯しているながら、その罪をまったく認めず、他人のせいに行っている人は、殺害の心が依然としてあり(非無)、罪の果報もこの人

「妙好人」と「善知識」の関係

金子大榮師の解説から、「妙好人」とは、数少ない希少価値の意味から「希有人」とか言われていることではないことを知りました。

我々のような凡夫が持ち得る者となるから、「希有」なことであり、「妙好人」と言われるのだと言うことです。

仏教では、「善知識(ぜんぢしき)」と言われる方もおられます。「妙好人」と「善知識」の関係をお話いたします。

妙好人とは

○意味 阿彌陀仏の救いを深く信じ、念仏の喜びの中に生きた「優れた信仰者」のことです。

○立場 基本的には教えを「受け取る側」「深く味わって生きる側」(在家の門徒等)を指します。

○特徴

・中国の善導大師が『観無量寿経』の言葉をもとに、念仏者を「白く美しい蓮の華(分陀利華)」にたとえ、「人中の妙好人」と称賛したことが語源です。

・江戸時代に『妙好人伝』が編纂されて以降、主に「無学でありながら、純粹で深い信心をもって日常生活の中でお念仏を喜んだ、一般の庶民」を指す言葉として定着しました。

善知識とは

○意味 人々を仏の正しい教えに導く「良き師」「良き友」のことです。

○立場 基本的には「導く側」「教えを伝える側」を指します。

○特徴

・元々は仏教全般の言葉ですが、浄土真宗では「阿彌陀仏の本願(他力の教え)」を正しく伝えてくれる人」を指します。

・七高僧や親鸞聖人、歴代の宗主(門主)等がこれに当たりますが、必ずしも高僧に限らず、自分を

こそが受けるのである」という意味である。
縁起思想からみれば、阿闍世の犯した罪は、種々の因縁が織り重なって生じたものであり、しかも、誠実に慚愧することによって、その罪が固定的なものでなくなるということを行い表している。罪に対して、決め付けた見方をしなくてはならない。むしろ罪をありのままに認め、罪から逃げずに、慚愧することこそが重要であるということをし、ここで釈尊は説いているのである。

このように、あらゆるものは固定的な実体をもたない空であり、すべては縁起であり、相互に関係しあい、支えあって存在していることを説いていった。すなわち、阿闍世がもっていた罪に罪に対する執着を、よりさまざまなケースやものの見方を示すことによって、離れさせていったのである。

「かたちなき罪」について、親鸞が記した言葉がある。

「罪業もとよりかたちなし

妄想顛倒のなせるなり

心性もとよりきよけれど

この世はまことのひとごとなき」

『正像末和讃』(107) 註釈版聖典六(一九)

罪業は、もともと固定的に実体として形をなしているのではない。罪は、偏った虚妄の分別ものを捉え、真実とは全く逆の見方に執着することによって生じてくる。心の本質は清らかであるにも拘わらず、この世界には真実の

人はいない。そう親鸞はここで明かしている。罪が形なきものであり、妄想や曲解によって生みだされるといふことは、『涅槃經』における釈尊の説法と共通する内容を有しているといえるだろう。

過去に犯した罪に縛られて後悔するだけならば、罪に執着して破滅的な人生を送ることになってしまふ。より大切なのは、その罪を抱えながら、未来に向かってどう生きていったらよいかということである。そのことを釈尊は、阿闍世に気づかせたのだろう。

このような縁起のものの見方の重要性については、ノーベル平和賞を受賞したダライ・ラマがわかりやすくこう説明している。

“One Life is not dependent on one cause and condition but on several causes and conditions. If we are able to understand that our life is multifaceted and dependent on many causes and conditions this realization will enable to lead our life in a more meaningful manner.” (Dalai lama, *Live in a Better way*, p.90, Penguin Compass, 1999)

〈現代語訳〉

「私たちの人生は、一つの因(原因)と縁(機縁)に依ってではなくて、いくつかの因と縁に依っています。もし私たちの人生が多面的で、

仏法に遇わせてくれた親族から身近な先輩や友人、人だけではなく、動植物、自然、そして亡き先人を「私の善知識」と呼ぶこともあります。

両者の関係

1. 「教える側」と「受け取る側」の関係
・ 善知識は、人々を正しい仏法へと導く「師」や「指導者」です。
・ 妙好人は、その善知識の導き(教え)を素直に、そして深く受け止めて信心を獲得した「門徒」や「庶民」です。
・ 善知識という正しい導き手がいなければ、妙好人のような純粋な信仰者は生まれません。

2. 「教えの正しさ」を証明する関係

・ 妙好人は、難しい仏教の理論や学問(教学)を修めたわけではありません。
・ しかし、その純朴で温かい生き様や、感謝に満ちた言葉は、善知識が説く「南無阿弥陀仏の教え」が真実であることを、自らの人生をもって証明しています。
・ そのため、善知識(僧侶や学者)の側が、むしろ妙好人の徳を敬い、その純粋な信仰から学ぶという「逆転の現象」もしばしば起こります。

3. 「導く立場」が循環する関係

・ 妙好人は、誰かを教化しようという意図や野心を持ちません。
・ しかし、彼らの喜びにあふれた念仏の姿や利他の行いは、結果として周囲の人々の心を強く打ち、仏縁を結ぶきっかけとなります。
・ つまり、「導かれた者」である妙好人が、いつの間にか次の誰かにとっての「善知識(仏道へ導く尊い存在)」になっているという美しい循環が生まれています。
(インターネット検索)

さまざまな因と縁によって成り立っていることを理解することができたなら、このめざめは、私たちの人生を、より意義のあるものにしてくれるべし。」

「Even though your focus may be on your personal happiness and well-being once you are able to understand how much your personal life is dependent on the surrounding environment, you will enable you to create a more harmonious life, not only for yourself but for others as well.」
(Dalai Lama, *Live in a Better way*, p.91, Penguin Compass, 1999)

〈現代語訳〉

「あなたは、あなた個人の幸福や安寧に焦点をあてているでしょうが、いったん、あなた個人の人生がどれほど多くの取り巻く環境に支えられているかを理解できたなら、あなたのものの見方や真実の理解をもっと大きく広げることができるよう。その広がった視座は、あなたが、より調和のとれた人生を創造できるようにさせてくれるでしょう。またそれはあなた自身のためにばかりでなく、他の多くの人々にとっても同じように。」

また浄土真宗本願寺派大谷光真(門主現在・前門さま)は、縁起の考え方の意義について次のように明かしている。

「あらゆるものは、すべてそのものだけで個別

に存在するわけではなく、つながり、結びつき合って、今そこにある。―これが縁起の考え方です。縁起の教えは、今日の環境破壊、武力紛争など、人間だけでなく、さまざまないのちが損なわれている事実を見つめ直すためにも、大切な視点であると思います。この縁起の教えにおいて、人間同士のつながりとは、親子、兄弟、親戚といった血縁のつながりだけを言うのではありません。ともに支えあって生きている友人、仲間もそうですが、一見、自分とは何の関係もないような人であっても、そこにはなにかのつながりがある、そう考えます。」

阿弥陀如来の広い大きな願いに心を開かれるとき、『私が幸せであればありがたい』『ほかの人々はどうでもいい』という自分中心の殻に閉じこもった態度は、それこそ縁起の道理を見失った無明の姿であると気づかされます。自分を中心として身近ないのちのことだけを考えるのではなく、もっと広いのちのつながりを考えてみてください。みな阿弥陀さまに救われる存在として同じ立場にあるのです。水も空気も含めて、すべての物がめぐりめぐってつながっている。山も川も私にいろんな恩恵を授けてくださっている。私もほかのすべてのいのちも阿弥陀さまに照らされ、救われるいのちとしてつながりがある。地球上の万物すべて、いや宇宙の万物すべてが、大いなるいのちのつながりのなかにあるのです。」

(大谷光真著『明日には紅顔ありて』)

一八一―一八四頁 角川書店

釈尊が阿闍世に示した、縁起の視座は、一人の人間が、多くの人々とつながり、支えあっているという、心の絆を生み出した。独りよがりな自己把握から、世界のあらゆるいのちとつながる広大な視座が与えられたといつてよいだろう。宇宙の万物すべてとつながる広大な視座が展かれてくるというのは、宇宙的な母性原理にめざめていくことであるといつてよいかもしれない。

このように釈尊は、聖者としてではなく、阿闍世とその父をよく知っている親友として、阿闍世の苦しみに寄り添った。釈尊は、罪にとらわれている阿闍世に、空と縁起というものの見方を指し示した。この縁起のものの見方は、より寛大で、幅の広いものの見方であり、誰もがどこかでつながっていることを教えたものである。一視点からだけ自己を理解するのではなく、多くの他の視点から自己を知り、多くの因と縁の中に生かされている自己に気づいていくことが重要であることを、縁起の視点は提示している。

ふりかえれば、縁起への目覚め、これを通して、阿闍世は、罪を多角度から充分に理解し、さまざまな人間関係の中で、ありのままに罪を受容できるようになった。そして同時に、父を殺したという大きな罪を償う意味でも、これからも他者との深い関わりのなかで生き、本来の意味で、支えあうような心の絆を育んでいかなければならないと自覚するのである。